

せたかむい

発行・古平町史編集室
古平町文化会館 84212590
第167号・平成15年8月1日

年表で読む

古平の歴史

(73)

小学校教育

― 沖小学校 ―

■ 沖学校が創立される

沖村周辺の海域は鯀の好漁場に恵まれ、ローソク岩周辺からセタカムイ岩にかけての沿岸は鯀の千石場所といわれた。

古平郡の中でも早くから開け、元禄二三年(一七〇〇)の記録によれば、アイヌが住んでいてすでに和人との交流があり、漁場であったと考えられる。

明治になると定住する人が多くなり、明治四年(一八七二)の古平郡の戸数調査では全戸数三一〇戸、沖村(当時はラルマキ)二八戸で、郡内の九パーセントに当たる人家があった。

その後も住民が増えると共に

学齢に達した者も多くなったが、浜中学校への通学には距離が遠いことから、明治一三年八月一三日、折から浜中学校を建築中であったが、民家を借りて沖学校を開校した。

校舎は、沖村川河口に近い小屋掛け同然の一五坪余りの建物であったが、これで古平郡内には浜中学校に次いで学校が二校となり、在籍児童数は合計一九五人となった。

学校名 男 女 計

浜中学校 一三二 一六 一五七
沖学校 一五 一三 三八

教員には諸橋源太郎が任命されたが、当時は学校長という職務がなかった。

開校当初の教科は、読方・作文・習字・算術の四教科であ

り、正規の教科から修身・養生訓・体操を欠いた。

明治一十九年、沖学校敷地のこ

とについて次のような文書が残っている。要約すると、

「沖学校についてはもともと借地・借家であることから、昨

年、総代が集まって、家屋・地所共に買い取ることに決めた。

だがその土地は海産干場であつて、学校の地所としては買い取

ることが出来ないで、それを分割して払い下

げをしてくれるよう出願中である。その後、地

目の変換を出願するつもりである。」

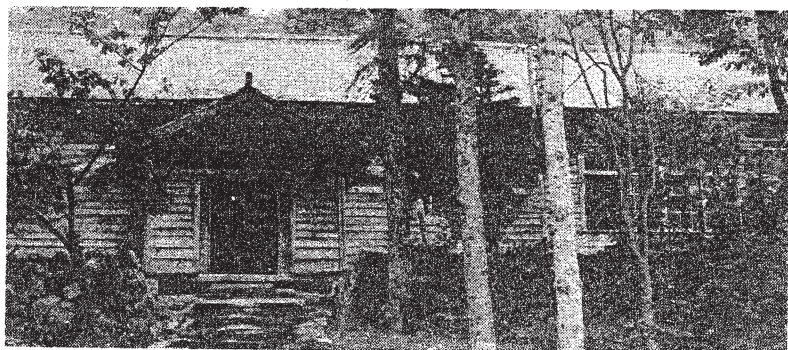
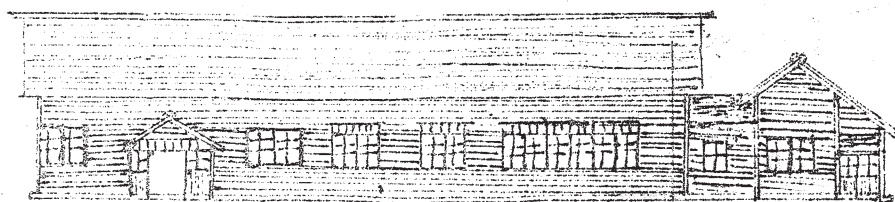
■ 沖小学校と改称する

明治一〇年四月、庁令によつて沖小学校と

改称し、修業年限四か年の尋常小学校となり、修身・体操が取り入れられて六教科となった。

明治一三年、就学児童の増加から新たに敷地を求め、約二倍の広さを持つ三三坪程の校舎を改築し移転した。

↑ 沖小学校正面図
← 高台に建つ沖小学校



大正 一 一 年

▼七月一〇日

一二日に、札幌へ拝観に行くことにしたので支度する。今日は発動機船共栄丸が、拝観に行く人たち一五〇人程を乗せて小樽に直航した。摂政宮殿下は午後六時一二分、お着きとのことだ。

▼七月一九日

今日も珍しい快晴、農園では

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【68】

起床六時半、天気快晴、近年稀なる厳しい炎暑である。皆白地を着て、暑い暑いと扇を使っている。農園では出面三人を入れて袋掛けをやっている。見落したのも多いとのことだ。午後二時から保護者会の協議があるというので学校へ行く。校長の話では本校の増築も間もなく出来上がるので、記念品を残したいが何か適当なものはないかという。卒業生や同窓生に寄付してもらいたいという。それなら

出面八人を入れて袋掛け。店は閑散。暑さの厳しいこと、日中は仕事も何もできない程だ。白地を着ても暑く、シャツ一枚でも暑い。裸になっていたいようだ。四時頃農園へ幾、四、五日見ないうちにリンゴもずい分生長した。キウリも六寸くらいになったものもあり、四、五本もいで帰る。

▼七月二一日

今日も暑さが厳しい。この頃の暑さで畑物も大分生長するだら

明治二四年になり、その後に関校した新地小学校・沢江小学校などと共に浜中小学校沖分校となったが、明治三六年、再び沖小学校となった。

■高台に校舎を新築する

児童数の増加はその後も続き、古材を使って建築した校舎の損傷も大きくなったことから、増改築の予算が町会に提案されたが否決され、ようやく明治三八年、高台に校舎の新築が決まり、同年八月、古平病院の古材を使用して二教室と運動場、それに校長住宅を付設して九三坪余りの新校舎が竣工した。

新築とはいえ古材を使用したため、特に寒い時期にはすき間風などが気になったという。この年の通学区域内の戸数八二戸、人口四三八人、学齢児童九一人であった。

明治四一年、修業年限六か年の小学校となったが二教室しかなく、児童数も増えたので二部授業午前・午後に分けての授業が行われた。

校舎が新築されて飲料水として沢水を引き、防火用水と美観

をかねて教員と児童が学校の前に庭に池を造ったり、地域住民の協力を得て植樹などをした。

樹木の寄贈

沖同志会 桜 桃 明治43年

須磨定吉 吉野桜 大正11年

沖青年団 落葉松 同

高野常吉 同、桜 同

■児童数の推移

年度	男	女	計
明治三六年	三九	一五	六四
四〇年	四四	二七	七一
四四年	五一	三三	八三
四年	四五	四六	九一
八年	五一	五〇	一〇二
一五年	五一	五六	一〇七

児童数はこの後も増加した。
→沖小学校児童明治四〇年頃



(次号11明和小学校)

う。この様子だと、この後リングの虫は余りつかないかも知れぬ。電気会社では祭礼飾りの周りに電球を七〇個から八〇個も取り付けた。祭りになったらさぞ賑やかになることだろう。毎日の天気続きで、町では砂塵が飛んでひどい。ひと雨降ればいいが――。

▼七月二〇日

今日も珍しい快晴。農園では出面六人を入れて袋掛け。店は閑散。暑さの厳しいこと、日中は仕事も何もできない程だ。白地を着ても暑く、シャツ一枚でも暑い。裸になつていたいようだ。

四時頃農園へ行く。四、五日見ないうちにリングもずい分生長した。この時期になると虫もあまりいない。キウリも大きいのは六寸くらいになったものもあり、四、五本もいで帰る。

▼七月二二日

今日も快晴。朝から暑さが厳しい。農園の袋掛けもいよいよ今日で終わる。まだ掛けるところはあるが実も大きくなつたので、これくらいで止めることにした。本年はリングが豊作のためか、小樽からの商人らはまだ

買いに来てない。電気会社では祭礼が近くなつたので、町中の飾り電気の取り付けに人夫を増やして一生懸命だ。古平もずい分と開けたものだ。関口郵便局長が一〇日頃から不快であつたそうだが、今晩三時頃死亡されたとのこと。実に気の毒なことだ。日頃は元気で楽天的な面白い人であつた。古平の人物を一人失つた。子どもさんも四人おられ逝かれるとは、実に人生は無情だ。

▼七月二七日

祭典も無事に終わり、町はひとつそりとしてゐる。皆祭典のあと疲れのようだ。寄付金の未納分を困支店へ持つて行き、精算のため原田さんへ行く。終わつて正午頃帰り、店の片付けをする。店は閑散。大謀漁場もボツボツ始まるので、アバ縄その他の需要もこれからあるだろう。二、三日前から少し暑さもしのぎ易くなる。

▼八月一日

今日は美国へ出かける。銀行へ寄つて④へ五〇〇円を送金する。自転車を安藤へ預けて美国へ陸行する。暑いこと、真夏の太

陽がカンカン照りつけ、白地一枚で汗だらけ。ハンカチや扇子でしのぐがどうにもならない。美国に着き、尾本でしばらく話をしてから、⑤へ行き、商用のあと昼食を馳走になる。子どもらの行儀の良いのに感心させられた。庭の植木や花を見せてもらったが、よく手入れされていて立派なものだ。⑥に寄つてから赤岩大満の番屋に寄り、船頭といろいろ話をする。アバ縄など入用とのこと。④旅館に寄り、学校記念品の寄付二円を受け取る。いろいろ話をしたが立派な普請だ。六時頃新保さんを訪ねて寄付をもらい、懐旧談に花が咲く。九日の月が輝いて静かな夜だ。

▼八月三日

蒸し暑い天気だ。今日も学校の寄付金のことであちこち歩く。学校のことというので成績はよろしい。夜ふろの帰り子どもと藤川で氷水を飲む。

▼八月四日

起床七時。店は閑散。午後久しぶりだ。鶴間のところへ遊びに行く。いろいろと世間話をして帰る。参考になることもあるもの

だ。五、六日前畑の方でばくちをして一人も押さえられたという。前にもあつたがなかなか止められないものとみえる。夜林田と西村にも行き寄付金をもらつて来る。

▼八月五日

起床七時。蒸し暑い日だ。マサさん、幸治、文治が積丹へ行くといふので、四時頃から起きている。支度が出来たので、馬車屋の春さんの客馬車を頼んで五時出発した。一一時頃着いたと電話がある。九時頃、美国赤岩の大謀の船頭が来て、アバ縄などについて交渉する。中アバ縄三円七〇銭、並アバ縄三円二〇銭と話したところ、中アバ縄一〇〇丸、三円五〇銭、並アバ縄二〇〇丸、三円として、三〇〇丸契約する。外にカニ縄五四〇把を一把二円五銭で売る。馬車九台に積み込んだ。合計一、一〇〇円になる。大謀漁場は実に大口だ。契約分が今月中に入金すれば上首尾だ。今後大謀への売り込みには充分力を入れねばならぬ。午後三時頃、自転車で銀行へ行く。のち丸山町方面を廻り、三時に寄り五時頃帰る。

▼八月六日

起床七時、小雨が降り農園の仕事も休む。私は集金をかねて校門の寄付金集めに出かける。沢江金で二〇〇円、丹後、仲谷を廻ってから、芭堂画伯のところへ寄る。しばらく話をしたが、学校へ何か絵を寄付したいとのこと。後で返事をするにしようとした。一時頃帰り、昼食の後、保木梅野に寄り、それから学校へ行って見る。目下普請中で忙しい。ブリキ屋が来ていてトタン屋根をふいている。出来上がったらずい分と立派な学校になるだろう。夕方になると、力が相変わらず甚だしい。Ⓢと安藤へ手紙を書き、一一時休む。

▼八月七日

起床七時、天気快晴。熊さんは早くから農園行き。店番をしながら帳簿整理などをやる。早や盆も近づいて来た。貸し方の未収分二〇〇〇円くらいあるが、年内に一〇〇〇円は入金するだろう。本年の貸し方二万余円のうち、一〇〇〇円の未収金であれば五分くらいなので、本年の漁からすればいたし方ない。貸さねば売れぬ。貸せば取れぬで

は商人もなかなか面倒なもの。しかし本秋からは出来る限り貸し方を減らし、半減せねばならぬ。店は閑散。洋画を売りに来たので二枚五円で買う。力が相変わらずひどい。

▼八月八日

起床七時、天気快晴。店は閑散。帳簿調べをする。盆前に少しでも掛け金を整理したいと思っているが、行くと言いつればかりで、なかなか入金の方ははかどらない。今秋から貸し方には注意せねばならぬ。午後、畑方面へ行き、帰り田の畑に寄る。水池の工事を見る。トウキミを馳走になる。

▼八月九日

朝食後、新地方面へ行く。銀行で用事をたし、金に寄り、注文した畳表の未着のことで問い合わせる。帰途、弓に寄ったら、大工さんが来ていて風呂場をこしらえている。午後から自転車で沖村へ行く。佐々木に寄りいろいろ話をし、女鹿にも寄る。八反田に寄り大謀のことについて聞く。一日には寿都から漁夫が来るので、その準備にも忙しいとのこと。六時半、電気がついて

から帰る。外はまだ明るく、沖村からの海岸の景色が良い。

▼八月一〇日

起床七時、天気快晴。この日、全前で厚田の某家の道具類のセリ売りがあるというので、父といっしょに行つて見る。すでに何人かが来ている。四尺びょうぶ一雙一二円、みそのコガ四本六〇余円、床の間の掛け軸一本九円を買う。その外、夜具やら家具などいろいろと出ていた。厚田方面も近年の不漁続きでこんなことになったとのこと。石倉や板倉も売り物になっているそうだが、漁場は漁が無ければ哀れなものだ。幸い古平方面はまだ漁が続いているが、油断はならぬ。

▼八月十一日

起床七時、店は閑散だ。困へは岡崎の知り合いだという学生連中三人が、積丹からの帰り寄っている。三人を農園へ連れて行き、リンゴの成っているところを見せたら、ずい分沢山成っているといつて驚いている。五十八号を取つて食べたが味もよく、これなら申し分ない出来だ。豊作のせいか買人も少なく、予想

していたような値が出ない。帰途、新築中の学校を見てから、墓地の上まで行き、古平町を眼下に見て帰った。

▼八月十二日

起床七時、午前中雨が降っていたが間もなく晴れる。夜、学会主催の弁論大会があるというので、新地古盛座へ平田、梅野両君を誘つて聞きに行く。なかなか上手な人もいるが、中でも野呂君が一番良かったようだ。一時頃帰る。

▼八月一三日

天気快晴。今日は盆の十三日、妻は仏参りの支度で忙しそう。私は店番。あちこちへ書面など書く。午後から仏壇の飾りなどをする。六時家族揃つて暮参をする。風も無く天気は良い、夕方なので暑からず寒からず実に気持ち良い気候だ。各地へ行っている人達も帰省している。先祖の霊に集まる美風は、古平の美談だと感じた。(続く)



朝のひととき

大澤 文子

本州各地の梅雨もあけ、近く夏本番だ。

早朝から太陽がカッと照りつけると、庭いっぱいの花ばなはひと際あざやかな色彩をかもしだす。

夏日になり一番爽快な季を迎えたはずなのに……。ベッドからおりる時の不快感はどうしたことか。右足の指の感覚もない、つけたはずの左足は床につかず、思わず書棚の隅につかまる羽目となる。右腕は付けねのあたりからジーンと電波が走り気だるい。

「まアうん十年つき合った脚ですものね。もうこのへんで……」

「どこかで誰かがつぶやく。なに！これしきのこと！」

いささかな抵抗感が頭をもたげ私に声をかける。

「脚さんヨロシクネ！右腕さんももう少しがんばってネ。以

来、足指の屈伸、腕のマッサージなど十五分、途端、身の内がシヤンとなる。

コーヒーの香りが部屋に漂い、レモンジュースをグラスに満たし、ことごとと半熟卵がゆで上がるころ、家人が揃う。

今日は、午後から会議に出席しなければならぬ。誰に会ってもはずかしい服装を……と、まず洋服タンスの中をこそご検討。

夏日に向かい、玄関先の打ち水も忘れられない。打ち水をしながらふと、いつか新聞紙上で読んだ記事を思い出した。

特に水を大切に——ということ、で、「水の日」が決められたのは昭和五十二年八月一日という。本州方面では特に猛暑が続く、水飢饉におそわれることがある。「水を大切に」のキャッチフレーズをもとに、真剣に

水に取り組んでいるという。福岡に教師をしていた姉もよく「水がなくて汲みに行くのが大変なの」と、切実に悩みをうったえていたことがあった。

その頃であつたと思う。ある新聞に、水道局で出したであろう面白い記事を読んだ。『さて、あなたは水ことばをいくつ知っていますか？親子水入らずで頭の体操にチャレンジしてみてください……』と。

「ウーン」頭の体操をする資格もないが、家人達と指折り数えて真剣に考えてみた。

「打ち水、水杯、水いらず、水かがみ、水もしたたる」ぐらいのところかな、と終止符を打った。ところがまだまだ「背水の陣、水ごり、誘い水、水入り、水かけ論」等々、書かれていて驚いた。その記事の隅つこの方にこんなことも書いてあった。

地球上の水の量は変わることなく循環している、というのが定説のようだという。『それならば戦国の武将達が飲んでいた茶の水を、歳月をへだてて今朝あなた達が飲んでいるのかも知れない。どんな気持ちですか』

その記事を読んで言葉もなく、「うーん」と再びうならざるを得なかった。あわてて台所の水道の蛇口をきつく閉めた。そして思った。

昭和二十二年、三年頃の古平町の各家庭には、まだポンプも水道もついていなかった。主婦達は近所の掘り抜き井戸水を汲み上げ、バケツに満たすと天秤棒で軽々と担ぎ、わが家の台所の水瓶をいっぱいにして使う。

天秤棒を担ぐことすら出来ない私は悲しかった。いくら練習しても、肩から天秤棒はガチャンと音を立ててずり落ちる。見かねて近所の若い人がいつも手伝ってくれた。悲しかったことは今でも忘れない。と共に、あの人に感謝の念を忘れることはない。いま改めて「水の大切さ」を感じ、遠い昔の歴史上の人物の絵姿を追うのだった。

さて、今日は大事な会議が待っている。朝食の片付けを急ぎますと、余市行きの朝八時のバスにようやく間に合った。混み合う座席の片隅に胸の鼓動を確かめつつ、ホッと息づく私だった。

古平いろはうた

い 火渡りの伝統守る猿田彦

古平の本格的な夏を告げる琴平神社の例祭も終わり、青い海、深緑の大地が目にしみる頃となりましたが、暦の上では早くも八日が立秋とあります。去年に続いての冷夏、これからの天候次第では農作物への影響が心配されます。

今年のお祭りは、新調した豪華で華麗な神輿に関心が集まり、天気もまずまずで、一世紀を超える伝統と格式のある行列に久しぶりに町も賑いました。

神様の町内巡幸も終わりに近づくと、町民期待の《天狗さんの火くぐり》でお祭りの最高潮になります。今年は例年以上に観衆も多く、まさに燃え盛る火のような熱狂ぶり、その興奮した顔に炎が照り、周りの観衆も天狗さんに見える程でした。郷土のお祭りは、やはり天狗さんの愛称がよく似合う。

昔は、天狗さんが火をくぐった後の燃えかすを、家の入口に打ちつけておくと火事にならない——という俗信があつて、子供たちも競ってそれを拾ったものでした。お祭りには子どもも大人も巻き込んで、夢中にさせる何かがあるようです。



→ いよいよスター登場、大歓声の中を勇壮な火渡り神事

← 新調の御神輿が町内を巡幸



以前、山口宮司さんが『猿田彦の火渡り』について書いてくださいましたので、その要点だけを紹介します。

「年に一度の例祭というのは、氏神様が御社を出られ、直接、氏子の生活をご覧いただくために御神輿渡御(おごりごぎょ)をするわけで、その途中での罪や穢れを、忌火(いひ)によつて祓い清めてから御社にお入りになる。」

一般に「火渡り」と言われている「火」は、清めのかがり火であり、本来は御神輿が渡つて清めるのが主意であるが、御神

輿の先導をする猿田彦が、まずその火の安全を確かめるために火渡りするのだが、現在はこの方が主になってしまった感がある。このような過激とも思える火渡りを行うようになったのは、御神輿かつぎの奉仕者の多くが「板子一枚下は地獄」と言われる漁業に従事する若者たちだったため、自分たちの災厄もいっしょに祓い清めてもらい、安全に漁業に従事できるようにという願いや祈りがこめられていたものと思われる。

このような神事を行っているところは道内ではなく、御神輿渡御をしても、参道の両側にかがり火を焚き、その間を通り抜けることによつて祓い清める神事をしているところはある。」

※猿田彦Ⅱ日本神話に出て来る神である。天上から神が高千穂の峰に降りて来るとき道案内をした後、伊勢の五十鈴川のほとりに住んだと伝えられる。伊勢市に猿田彦神社がある。

天狗(てんぐ)は山中に住む伝説上の怪物だが、猿田彦と顔かたち似ているのか、古平では猿田彦を昔から天狗さんと呼ぶ。

中 戦

泣き笑いの 樺太漁場体験記

後 戦

吉 野 慶 一 郎

今年もまた八月が巡って来ました。日本の暦に八月十五日は「終戦記念日」「戦没者を追悼し平和を祈念する日」と明記してありますが、国旗を掲揚しない記念日です。今では戦争を知らない人たちが多くなり、この記念日の意義も薄らいできたように思えます。しかし、樺太でこの八月十五日を迎えた私たちのにとっては、生ある限り忘れることのできない痛恨の日でもあります。あれから六十年近くの歳月が流れましたが、今もなお、ソ連軍への屈従と生死の境を体験したことが昨日の出来ごとのように、いやでも鮮明に脳裏によみがえり、私たちにとっては『敗戦の日』として迎える毎年です。

せとかむい・160号へそして
迎えた八月十五日に続けて――

君が代、雑音の中 この日は
陛下の放送を聞く 朝から快
晴、そしてこの頃としては珍し
い程の暑い日でした。

朝から家族総出で粕干しをし
ていましたが、夕方片付けるこ
とにして皆が帰宅し、私は神社

で行われる町の招魂祭に出席し
ましたが、今日正午から重大放
送があるというところで、早めに
急いで帰宅しました。

昼の食卓には、近來にないご
馳走が沢山並んでいました。特
に当時は貴重品だった砂糖の入
ったお汁粉？ があり、甘党揃
いの皆は大喜びでした。

「さすが純綿の味は格別、懐か
しいねエ」

と、久しぶりの甘味に歓声を挙
げて賞味しました。（純綿Ⅱ代
用品ではない、本物だという意
味の当時の流行語。綿製品に替
わって人造繊維が出回ったが、
品質は粗悪なものであった。）

母も上機嫌で、

「今日まで辛抱させてきたけ
ど、今となつてはもう貯える必
要もないと思うので、これから
はできるだけ元氣の出るよう
に、心残りのない食事にするつ
もり。今日はお腹いっぱい食べ
ていいよ」

と、氣前のいいことを言つては
いたが、これからの生活への不
安ものぞかせていました。

早めの食事すすみ、重大放送
だと言うが何ごとかと、皆がラ
ジオの前に集まりました。

やがて正午の時報後、君が代
が流れました。その後、いよいよ
天皇陛下の放送が始まりまし
たが、どうしたのか雑音が激し
く、陛下のお声も途切れ途切れ
の上に高かったり低かったり
で、よく聞こえないうちに終わ

ってしまいました。初めて聞く
陛下のお言葉でしたので、なお
のこと聞き取れなかったのかも
知れません。

その後、アナウンサーのてい
ねいな解説により、日本がボツ
ダム宣言を受諾して無条件降伏
したことを改めて知りました。
それを聞いて、一瞬、目の前が
真っ暗になるよう感覚で声も出
ませんでした。

しばらくして親父が、
「これで、戦争が終わったとい
うことか……」とボツリ、悲痛
な声を出しました。

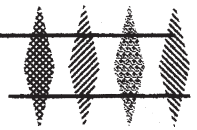
「負けた！」と言わないところ
に悔しさがにじんでいました。

その時、小学生の妹が、
「戦争が終わったんだって？」

良かったね。今晚から、電灯
を消さなくてもいいんだネ。あ
あ良かった！」

と、ひとり手を上げて喜びはし
やいでいたのが、妙に印象的で
した。

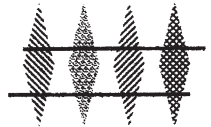
連夜の灯火管制で不自由な生
活だったし、妹の無邪気な喜び
のひとつで一同もようやく我
に返ったのでした。（続く）



札幌通信第8信

漁師のせがれ

吉川 義雄



陸の孤島時代の積丹半島。海と山と崖に囲まれた古平で生まれたことに、不幸を感じたことなど一度もない。

幼年期、たまに小樽へ連れられ、ライスカレーなるものを食べさせられても、漁師の倅(さへ)の舌に合うわけはなく、運河通りの喧騒に辟易(ひきやく)しただけ。ただ一つ嬉しかったことは、月遅れの雑誌を適当に合本して一冊にまとめたものを、露店の店で数冊買ってもらったこと。

漁師の家には読むものなぞは無く、迷い込んで来た古新聞や古平雑誌を、うっかり踏んでもまたいでも叱られた。

父も母も、結構活字文化の尊敬者らしかったが、さりとて何を買ってくれなかった。

小学校の高学年の頃、私の活字好きを見かねたように、祖父の方が新刊の「神州天馬峡」(吉川英治作)を小樽から買っ

て来てくれた。著者の「吉川」が気に入ったらしい。驚喜してむさぼり読んだ。私の人生で、教科書以外で買ってもらった最初の本であった。

このことに触発されたのか、今度は父が「東南アジアの地理」を買って来てくれた。父の知識からでも、私の好みでもなかったが、当時の私には本であれば何でも良かったから、これも夢中で読んだ。インドシナやシャム、ジャワ、スマトラのまだ見ぬ世界が毎夜の夢の中に入り込んできた。

漁師の倅が上の学校に行けるとは夢にも思わなかったし、望みもしなかった。さりとて漁師をしようとも思っていないから、親にとつて、これ程中途半端な倅は頭痛の種だったはず。

小学校を卒業間際に、札幌の書店奉公の話を担任の先生がもって来てくれた。私は小躍り

し、親たちも賛成せざるを得なくなり、札幌行きは外国行きみたいなムードの中で決まった。わが家は誰ひとり札幌なんか知らないし、見たこともなかったのだ。

十字街と言っていた、札幌の中心で寝起きする書店勤めは、言葉のなまりを笑われるのだけ我慢すれば、何の苦もなかったし、本に囲まれた生活は快適だった。寝泊まりを共にする地方出身の少年たちも多分にもれず本好きで、みんな寄宿舎の中で何かを読みふけていた。

本は汚さずに店に返しておけば、何を読んでもよいというお達しで、図書館の中にいるようなものであった。

七年の歳月が流れ、寝泊まりしていた仲間が急速に居なくなつた。戦争の余波は容赦なく地上の楽園を浸食していた。

召集令状が来たとき、発売禁止になっていたトルストイのアンナ・カレーニナを読みふけていた。最終部分をポケット版にして、古平から横須賀の海兵団入隊前日までシャニム二意地になつて読み続け、そして読了

した。戦争は本など読ませてくれな。修羅と地獄と餓鬼の世界を広げるだけである。

その世界から三年を経て生還できたのは幸せであった。古平のわが家に残っていた蔵書たちが、背文字を光らせて私を迎えてくれた。感激だった。

以前通り古平に本屋は無く、戦争の荒廃で都会に出て出版ゼロだから、読みたい雑誌ですら入手は至難であった。

幸い昔のよしみで何種類かの雑誌を予約でき、それが古平の友から引っ張りダコとなつた。回し読みにあつて、私のところに返されてくることはまずなかった。

宝海寺の若さんがわが家で読経した後は、私の蔵書の前にかみ込み、何冊かを借りて帰られた。

私と再会して安心したのか、それとも以前通り夢中で読まな。いのに反逆したのか、昭和二十四年の大火で、私の大事な友は一冊残らず灰燼となった。読んだつもりの内容もアヤフヤで、私は漁師の倅に戻っていた。

——樺太へ——(続き)

「古年兵殿は古平町出身の松岡さんではないでしょうか？」

いきなり言葉をかけられ、相手はびっくりしたように、

「そうです。松岡ですが、君は？」

「自分は松岡さんより、小学校で一級下の橋ですが、分かりますか？」

まじまじと私の顔を見ていたが、やっと思い出したように、小学校の子供の頃に別れたとき、一度も会ってなかったので無理もない話だ。

「やあしばらく。いつからここへ？」

「自分は、五月に盛岡の北部六二部隊に召集で入隊し、部隊が解散になり、こちらに転属して来ました。自分は二中隊です。」

松岡さんは何中隊ですか？
「俺は一中隊だ。隣の中隊だ、良かったナ」

互いに六年ぶりの再会を喜び合い、しばらくは積もる話に花が咲いた。

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

橋 義 春

(松岡さんは昭和二〇年八月一日、樺太国境近くの北極山で圧倒的な連軍と死闘を繰り返し、衛生兵長として負傷兵を救出し、その手当て中壮烈な戦死を遂げられた)

連絡船は樺太の大泊港に到着。早速船からの荷下ろしの使役に初

年兵が駆り出された。

私達の担

当した荷物は物品販売所のほとんどが食料品で、それもお菓子や羊羹類が多い。お腹は相変わらず

の飢餓状態だ。天から与えられたこのチャンスを見逃すという手はない。運んできた荷物は野積みにする。その時に荷物を乱暴に放り

出すと木箱が破損する。そこが狙い目だ。野積みが終わると交替で見張りをしながら、破損した木箱の中に手を入れては、お菓子を腹の中に詰め込んだ。羊羹があんなにうまいものとは知らなかった。空きっ腹にお菓子が満腹になるまで詰め込んだので、お腹の虫もさぞかしびっくりしたことであろう。

大泊駅からまた汽車に乗り上敷香へと向かった。樺太は行けども行けども落葉松と、えぞ松の林が続く何の変哲もないところだ。大変なところに来たものだと思った。汽車は俺達の心配をよそに走り続け、終点の恵須取駅に到着した。ここからは行軍で上敷香の要三三四二部隊の兵営に入り、幕舎で二、三泊したような気がする。その時、九里の飛行場近くで山火事が発生し、消火のために中隊から大勢行った。私はほかの使役に出て行って行かなかったが、大変だったらしい。

この頃はまだ上敷香以北には鉄道がなかった。駐屯地の気屯まで歩いて行くことになった。

上敷香——大木——初問——保恵——千里——九里——亜屯——気屯となっていて百キロはある。炎天下の行軍でアゴを出して落後し、トラックで気屯へ入った。

気屯の連隊の三角兵舎は未完成だったので、気屯川の辺りで幕舎生活をし、私達は連日、練兵場の地ならしや、生まれて初めて土方のモッコ担ぎをやらされた。同年兵の工藤は経験があり、私を相棒にしてモッコ担ぎの要領を教えてくれたが、何しろ瘦せているので肩が痛くて参った。

ある時、幕舎へ「橋、面会人だぞ」と知らせがあった。誰だろうと思いついて見ると、何と親戚の矢代敏夫さんの兄の正夫さんであった。上敷香の輜重隊で来たにいて軍曹になっていた。

「郷里から知らせがあった。連隊へ食料の受渡しをするので来ています。何日か気屯に泊まるので幕舎を張ったところだ。俺の幕舎へ来い」

(続く)

俳句鑑賞

お楽しみコーナー 7

句集『初雪』ゆかり妃殿下の御句

前回では、もっぱら三笠宮若杉殿下の事どもに
触れ、ゆかり妃殿下の御句には触れておりません
でした。妃殿下の「ゆかり」は俳号です。

句集『初雪』に採録されている俳句は、むしろ
若杉殿下より多く、凡そ五倍になっております。

句作の場合は若杉殿下に同道される機会も多く、
更には日常生活の中での俳句をも句集の中で発表
されております。

古代オリエント史の学者でもある若杉殿下の
自然諷詠に対し、ゆかり妃殿下の御句は日常生
活、われわれの側の家庭生活、お子さまたちの
こと、そして旅吟など句作の場は多岐にわたっ
ています。

三人の子の母はわれ紀元節 ゆかり
昭和二十三年二月十一日次男誕生の謂れがつけ
けています。お子さまの日々を写生した句を数
句拾ってみますと、

春昼や子と戯れてかくれんば ゆかり
吾子の手に光る破片は氷らし
吾子に文書く十勝野の萩のこと

俳誌悠主宰 水 見 壽 男

これ僕のと聞く子我編むスエーターに
小さき掌に捧げ持ち来ぬ雪兎
入学の門に見上ぐる山桜

いずれも、写生の中にお子たちへの愛情を込
め、俳句の詩情で包んだ佳句揃いです。

勿論、俳句大会や祝賀では両殿下とも一緒
ですから、私もたびたびお会い出来て、お言葉
を交わし俳句の話などさせていただきまして、
父悠々子はひげの悠々子で全国的に知られてお
りましたので、父のことなども話題となり、談
笑のうちに時を過ごしました。

それでは今回は、ゆかり妃殿下の北海道で作
られ俳句を拾ってみましたと思います。

蝦夷の山今まのあたり船涼 ゆかり
汽車は今十勝に入りて萩の花
穂藻見る湖水は青し糸とんぼ
炎天の砂利道長く白かりき

コスモスをよぎり老いたる修道女
馬糞糞しジングルベルをくちずさむ
いずれの句とも感性に磨かれた、それでいて
優しさの彷彿とする佳句ばかりです。

編集雑記

▽夏を素通りして八日は早くも立秋
です。太陽が地球をひと回り(三六〇
度)すると考えて、それを二十四等分
した季節区分の一つが立秋です。

▽昭和三〇年代の写真をみると、各
家庭では、冬の燃料にするまき切り
や石炭運びに汗を流していました。

▽昭和45年頃に古平町が制作した
『青い海と緑の大地』という16ミリ
映画の傑作がありますが、宣伝不足
のせいか意外と知られていません。

ビデオに編集してありますので、町
内会の集まりや個人でもご覧にな
りたい方は町史編さん室へご連絡く
ださい。ただし、フィルムを映写した
ものをビデオカメラで撮影しました
ので、画面のちらつきが気になります。

す。昭和初期の活動写真?よりは少
しマシといったところでしょうか。

▽雑誌『むい』に投稿された短歌(一
〇人二〇〇首と俳句(二人二〇選
〇句)をまとめて『文芸二人二〇選
・短歌と俳句のきらめき』近く出来
上がります。ご愛読ください。

▽先月、稲倉石会の集いがあり三〇
ページ程の冊子を作りました。その
冊子が欲しいという方が居られるよ
うですが残部は全くありません。

短歌

古平町岬短歌会

父の舟を待ちつつ妹と浜に居て小石集めき八十年過ぎぬ
紫の横雲水平線に見るは久し遠き日の鰯場の朝甦る

池田 テル

来てみれば墓辺に大して草も無くうからの現在を墓標に
話す

食パンをゆつくり縦に割きて食むかかる静けさ痴呆す
むか

鈴木 時子

夏野菜その花々の美しさ見てゐて美味しさ届きくるなり
新しき神輿を担ぐ若者等の掛け声熱き夏祭りかな

田中 香苗

俳句

古平俳句会

大根蒔く準備ととのへ雨を待つ 斉藤波留

木瓜咲くや下校の子等のさんざめき 山口悦子

満開の牡丹に顔の映ること 越野敏雄

大寝言聞き明け易し旅枕 大和田絵伊

定置網の支度もすすみ沖仕事に漁夫ら日焼けし頼もしく
見ゆ

徹夜して祭りの着物縫ひくれし幼な日の母常思ひ出す

丹後 初江

駐車場にをればふはふは光りつつポプラの絮毛わが肩に
寄る

浜茄子の花見て海より離れ来ぬ波のさはめき耳に残れり

堀 典子

潮騒の香りとじこめ夏衣 高橋重子

指笛の子犬駆け来る夏木立 仲谷比呂古

漁火の数多くなり夏の海 泉清三

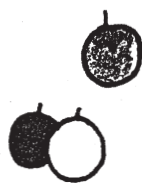
如月の森の表情穏やかに 外山俊久

夏霧を遠くに置きし湖畔宿 越野清治

幸平 吟

昏るまで青田をあさる鴈かな

磯遊び髪に汐の香持ち帰り
かたまりて遠ざかり行く夏鳥賊火



先月号掲載・次のように訂正いたします
① 出て来そふ光源氏の簾かな
② 出てきさふ光源氏や簾かな

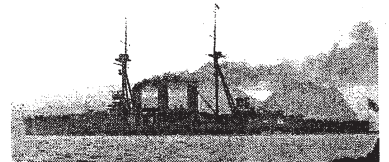
仲谷比呂古
仲谷比呂古

古平町史年表

16

大正8年(1919)

- ▲大時化で湾内の船や鰯網に大きな被害が出る
- ▲鰯積み取りに来ていた帆船安全丸が大破し、岸に寄った鰯を拾う人で浜がごったがえす。
- ▲浜町土谷座の映写室から出火し(5/7)、230戸余りを焼失する大火となる。
- ▲浜町の大火から間もない6月2日、土場(古平橋たもと付近)から出火し11棟19戸を焼失する。
- ▲古平尋常高等小学校増築のため、三山神社が移転する。



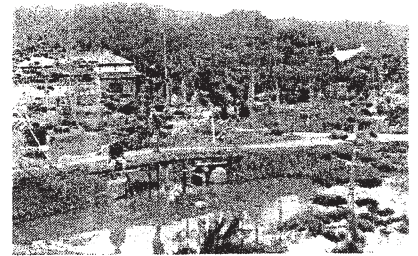
古平湾内に停泊する軍艦・鞍馬

大正9年(1920)

- ▲帝国水難救済会古平救難所が設置、初代所長斉藤兼太郎
- ▲古美水力電気株式会社が設立され、代表取締役山口金治
- ▲鰯の漁獲高が7万石(52,500ト)の最大漁獲量を記録する。
- ▲連合艦隊40隻余りが小樽へ入港、船で見物客が行く。
- ▲巡洋戦艦『鞍馬』(14,600ト)が古平湾に停泊、町を挙げて歓迎行事が行われる。
- ▲尊老人会で75歳以上の老人78人中68人が出席する。
- ▲10月1日第1回国勢調査が行われる。

古平町の戸数1,465戸・人口7,877人

- ▲鉄道敷設踏査のため、32人が稲倉石から然別へ向かう。



①公園(偕楽園)と園内の池のほとりに建つ別荘(溪山荘)

大正10年(1921)

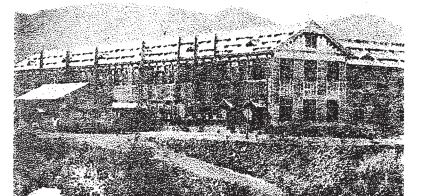
- ▲積丹半島鉄道敷設期成会総会が古平小学校で開催される。
- ▲巖島神社奥殿が落成し、これを記念して祭礼が行われる。
- ▲禅源寺観音堂落成(種田富太郎寄進)入仏式が行われる。
- ▲古美水力電気株式会社を帝国電灯株式会社が買収し、町内に初めて電灯がつく(11/5)

大正11年(1922)

- ▲帝国電灯株式会社の開業披露祝宴会が開かれる。
- ▲浜町郵便局が開局する。初代局長に高野常吉が就任する。
- ▲通称・①公園の別荘(溪山荘)が落成、公園まつりが開かれる。
- ▲古平信用組合が事務所を新築、現在地に移転する。
- ▲豪雨で港町の裏山が崩れ家が破損したが、住人の被害無し。
- ▲鉄道敷設調査のため鉄道院から技師が2名来町する。
- ▲大謀でマグロが大漁したが、東京方面でコレラが発生したため輸送できず大暴落する。
- ▲古平尋常高等小学校増築校舎(東側校舎)が落成する。



金融機関として偉容を誇った古平信用組合の新事務所



東側の増築校舎が落成
児童・生徒数1,300余人